

図書紹介

森林の持続可能性—その歴史、挑戦、見通し— (Donald W. Floyd, Forest Sustainability—The History, the Challenge, the Promise (The Forest History Society, 2002))
(著者：ドナルド・W・フロイド，訳者：村嶋由直，発行所：(株)日本林業調査会)，103頁，2004，1,500円（税込み）

1992年の地球サミットで採択された「森林原則声明」が、森林経営に関するそれまでの sustained yield という概念から sustainable forest management という概念への転換点になったことは周知のところであるが、本書は西欧を中心とした森林の取り扱われ方がどのように変遷してきたかを俯瞰してくれている。

特に、「3 聖なるものから持続可能なものへ」と「5 持続可能性への挑戦」での北米の森林に関する記述は充実しており、先住民と移民との森林に対する意識の相違を浮かび上がらせつつ、産業としての林産業振興と森林の保護活動の流れ、アメリカ国内での森林資源の変化の変遷を整理してくれている。

「5 持続可能性への挑戦」での最近の世界の森林資源と林産物の消費の現況については、原著でのデータがFAOのForest Resources Assessment 2000が公表される前であったため、1995年時点でのデータであったところ、訳者よりFRA2000のデータが加筆され解説されているので、最新のデータとなっている。また、訳者によって引用文献の邦訳書を脚注にて整理してくれてあり、森林なり、自然環境を大学レベルで勉強する際の入門書・参考書として大変ありがたい。

「4 持続可能性、その概念の具体化」での基準・指標の取り組み、モデル・フォレストの事例紹介、森林認証とラベリングの取り組み等についての記述は、著者の考えがかなり打ち出されているとの感を受けた。この部分は「5 持続可能性への挑戦」につながる部分であり、関連づけて読んでいただきたい。

100ページ弱の中で、sustainable forest management を考える際の主要な要素が、ほとんど網羅されていると感じた。さらに、それは著者の西欧人としての宗教心にも裏打ちされた信念によって、紐解かれた解説書であるとも感じられた。

世界全体での sustainable forest management というになると、やはり東洋的な見方・歴史も重要であろうし、開発途上国サイドからの見方も並べて見る必要性があり、読者におかれては、本書をベースにそのような方向へ進んでいただけないかと思う。

先ずは肩肘を張らずに、本書を読んでいただきたい。翻訳書特有の難解さは余り感じられず、途中で立ち止まってしまうことはほとんど無く、数時間で読破出来る好著である。
(永目伊知郎)